12/10 福井

論説

題字・塚本 芳子（三国町）
カット・神内 八重

基地計画に遺骨と土砂

米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設計画を巡り、玉城デニー知事は防衛省が申請した設計変更を不承認とした。軟弱地盤に対処する調査が不十分とし、埋め立て用土砂の調達先に太平洋戦争の激戦地だった沖縄本島南部を加えたことに不快感を示した。地中には福井県を含む全国の戦没者の遺骨が残っている可能性があり、終戦から76年たった今も収集が続いている。移設の是非以前に国は戦没者の尊厳をまず守るべきだ。

沖縄だけの問題ではない

沖縄戦は熾烈な地上戦だった。日本軍は劣勢に立たされても降伏せず、首里から南部への撤退を決行した。持久戦で米軍をくぎ付けにして、本土上陸を遅らせる戦略を取った。沖縄を本土決戦の拠点にしたい米軍は攻撃をさらに強めた。

犠牲者は日米双方で20万人を超えた。この中には本土出身兵の約6万6千人が含まれる。糸満市にある「平和の礎」には、福井県出身の沖縄戦関連戦没者114人が刻銘されている。

沖縄県によると、約28000柱の遺骨がまだ見つかっていないという。多くは南部の地中にあるとみられる。越前市の湯本（旧姓青木）多美子さん(83)の父武夫さんもその一人だ。

出征したのは1943年8月。母を2カ月前に病気で亡くしていた湯本さんは、弟の手を引いて実家近くの踏切で列車を見送った。父は寂しそうな笑顔でデッキに立っていた。2人の幼子を託した祖母への遺言状には「オ國の為 立派ニ死ス」と書いてあった。

白木の箱の中に父の遺骨はなく、名前が記された板切れが入っていた。除籍簿には「昭和二十年六月二十一日時刻不詳沖縄本島島尻郡米須ニ於テ戦死」と記されていた。この通りなら、組織的戦闘が終結したとされる6月23日の2日前に現在の糸満市で亡くなったことになる。湯本さんは「父の遺骨が紛れているかもしれない土砂が、墓地の埋め立てに使われるかと思うと怒りが収まらない。犠牲を二度強いるのですか」と語る。南部は福井県民にとっても特別な場所なのだ。

風化した遺骨は石灰岩や土と同化している。見た目では判別しにくく、遺骨が混ざらない状態で土砂を採取するのは困難という。

戦没者遺骨収集推進法は遺骨収集を「国の責務」としている。戦争を国策として遂行した以上、国が最優先すべきは遺骨の身元を特定して遺族に一日も早く引き渡すことだ。責任を果たさぬまま土砂を調達するのは到底理解を得られない。

全国の地方議会では土砂採取の見直しを求める意見書の採択が相次いでいる。越前市会も可決した。沖縄戦と向き合い、今も地中に残る戦没者の無念に寄り添うのは国民共通の命題だ。